

下手の横好き

—— 数学とわたし、そして京都大学理学部数学教室 ——

富永 星 (1980 年学部卒)

大学時代に学部生としてお世話になって以来、数学教室にはずっと足を向けていなかったわたしが久しぶりに数学教室を訪れたのは、二〇一二年に日本数学会の協力による”Journalist In Residence” (ジャーナリストが大学数学教室に滞在して先生方にインタビューするというプロジェクト。2010 年開始) に参加したからだった。滞在中は事務の方々におおいにお世話になり、それがきっかけで同窓会の設立総会の後の懇親会でスピーチなるものをする事となった。そのときにも触れたのだが、世界レベルの研究者を育てることが京都大学理学部数学教室の第一の使命であるとすれば、わたしは歴然とした「落ちこぼれ」である。

今にして思えば、わたしと数学の関係には、「下手の横好き」という言葉がぴったりくる。そんな人間が、なぜこの数学教室に迷い込んだのか。

そもその発端は、中学時代に故遠山啓氏の「無限と連続」をテーマとする市民講座に参加したことだった。ちょっと背伸びをして「数学が好き」といっていた女子生徒が、数学担当の先生に、こういうのがあるけれど、行ってみる？といわれて、のこのこと水道橋のビルで行われた一回きりの講演会を聴きに行ったのだ。どちらかというとも哲学に近いところがあって数式なしでもエッセンスが伝わり、しかも深いテーマに接したわたしは、「こんなに奥深いものがあるんだ！数学ってすごい！」と大いにショックを受け、あらためて数学に興味を持った。

そして高校時代、特に数学ができたわけでもないのにかなりしつこく数学に食い下がった記憶はあるが、いわゆる理科に興味があつたわけでもなく……ただ数学科があるというだけで京都大学理学部に進学したわたしは、一回生の夏前に、まわりの人々と自分の思考回路がまるで違うという事実と直面した。

入学した年の理学部新入生は確か計二三八名で、教養のクラスは第一外国語別に編成されていた。一組だけがフランス語で、あとはドイツ語が多く、ロシア語もあったような気がする。当時はブルバキの余韻もあって、フランス語を学ぶ一組には数学志望の学生が多かった。それらの「数学科志望」の面々とわたしとは、どう考えても関心の持ち方、考えの進め方が違ってた。漠たるイメージだけで大学に入った付けが早くも回ってきたわけで、ああ、自分のは下手の横好きだったのだな、とつくづく思った。では、研究者として「数学をする」以外にどのような道が考えられるのか。今思うと、完全に数学と絶縁するという選択肢を思いつかなかつたのは実に奇妙な話なのだが、最初に思

い浮かんだのは「中等教育の数学の教員」だった。これには小中学校時代の先生方の存在が大きく影響している。その先生たちに出会ったことで、算数（数学）にかかっていたもやがさっと晴れ、さらに遠山啓氏の講座で数学の魅力を実感するという経験をしてきたからだ。教える人の力量ひとつで、算数（数学）という素材が訳のわからないものにもすばらしいものにも感じられる。そのことを学ぶ立場で痛感していたので、「数学ができる人が、必ずしも数学を教えるのが上手とは限らない。教えるときに必要なのは相手がどこで躓くのかという想像力であり、それなら自分も十分に持っている。それに、そもそも数学に魅力を感じていない人間に数学は教えられない」と考えたのだった。そこでまず、数学の教員として数学と関わろうと心に決めた。

「自分にとって数学とはスルメのようなもの」というのがこの頃のわたしの実感だった。下手をすれば、歯が欠けたり顎が外れたり（！）するくらい手強いが、噛めば噛むほど深くいい味が滲みだしてくる。こんな動機不純な人間だったから、学部では数理学系に登録したものの、数学漬けどころか、迷える青春真っ盛りだった。世界各国の現代文学の翻訳を片っ端から読んでみたり、大学のすぐそばの日仏学館に通ったり、ブリティッシュ・カウンシルに通ったり、一度などは真剣に言語学への転科を考えた。それでも大学に行けば、数学教室か北部生協に向かい、数理学系に登録している同級生（そのうちの何人かは院に進学し、研究者になった）と話をし、講義を聴く日々だった。柴雅和先生の演習や、松本堯生先生の演習もとっていたが、内心、こんな自分で大丈夫なんだろうか？とひやひやし通しだった。先生方のざっくばらんで気取らない人柄ははっきりと記憶に残っているのに、そこで何をやったかは、正直行ってまったく記憶にない。ところが、一般向けの数学啓蒙書の翻訳を手がけ、”Journalist In Residence”であちこちの大学の数学の先生方からお話を伺うようになると、そんななかでもどうやら数学的な物の見方を吸収していたことに、遅ればせながら気がついた。数学教室自体が持っている雰囲気や先生方のたたずまい、同級生の有り様といった環境に、自分では気づかぬうちに、しかも今では自分でも弁別できないくらい深いところで影響を受けてきたらしい。

さて、四回生になると、いつまでも悩める青春をしているわけにもいかず、当然講究を取ることになる。複素変換に関する原書講読の講究では、楠幸男先生にたいへんお世話になった。一枚の平面が変換で無限らせんのような面になるという視覚的なイメージや、無限を有限に閉じ込められる（なんと乱暴な把握！）といった事実がたいへん興味深く、また、紳士的な先生のたたずまいにはほとんどあこがれにも近いものを感じて、充実した時間を過ごさせていただいた。（楠先生、不肖の学生でごめんなさい！）

講究とともに、四回生では進路という問題が目前に迫ってくる。そこで、自分はいったい何がやりたいのかを大まじめに振り返ってみたところ、本に関わること、言語に関

わること、数学の教育に関わること、の三つが浮かび上がってきた。ということは、本に関わる出版？ 本に関わる図書館？ 数学の教育？ 外から見たらてんでんばらばらに見えるこれらの選択肢を前に、正直行って思案投げ首。そのような悩みを抱えながら大学に行っていたある日、数学科の同級生から、「なんか、生物のほうで面白い講義している先生がいるらしいで。見に行かんか？」と誘いがあった。それは、生物系の学生を対象とする山口昌哉先生のカオス理論の講義だった。講義に潜り込んでみて、面白いなあと思いはしたものの、出席したのはその一度きり。ところがまったくの偶然から先生とあれこれお話をすることとなり（もちろん最初に、講義に定着しなかったことをしっかりお詫びした。）、先生はわたしの迷いを察知されたのか、「数学科を出たからといって、数学をしなくてはならないというわけでもないんやで」とおっしゃった。具体的な例まで挙げて。そしてわたしはこの一言に背中を押されるように、図書館司書として社会に出た。なぜ先生のある言葉がそれほどの重みを持ったのか、もちろん先生のお人柄もあったし、ほかにもいろいろな条件、理由が重なっていたのだろう。それにしても、数学科の先生が「数学せんでもええねんで」という自由さは、俗に京大の放任主義といわるものが単なる放任ではないことの証しであり、この数学教室の懐の深さを示しているのではなからうか。

その後、司書から中等教育の教員になり、さらなる紆余曲折の末に、一般向けの数学啓蒙書を英語から日本語に翻訳する仕事を始めたわたしは、英米の数学者たちが一般の人々に向けてまとめた啓蒙書の翻訳を手がけるようになった。願ってもないことではあったが、研究者や研究の世界を知らない自分の底の浅さがしきりと痛感され、遅まきながら数学者と数学の世界について知りたい一心で、“Journalist In Residence”に参加した。

こうして二〇一二年に久しぶりで数学教室に足を踏み入れたわたしは、押し寄せてきたふしぎな懐かしさに驚き、戸惑った。数学教室の中庭の風景、木貼りの静かな廊下……耐震補強や美しいトイレなど、むろん変わったところもあるけれど、そこに流れる時の流れはほとんど変わっていないような……いったいこれは何なのだろう。そういえば学部三回生の頃には、授業は九十分なのに、六十分遅れて教室にやってきて、そのまま三十分間講義をして何もいわずに帰って行った先生がいたっけ。世界的に有名な業績を上げられた●●先生、だったかな？ 学部生の中で、どこそこの院生が北白川のあたりでストーリーキングをして捉まったという噂が立ったこともあったなあ……（当時はストーリーキングがはやって(?)いた)。学者の世界は、自分だけを恃む究極の厳しい世界であり、そこで日々活動している方々にはただただ尊敬しかない。それにしても、あの頃の数学教室からは、自分が好きだと思ったことをとことん突き詰めている人たちの持つ独特の自由さ、平らさが感じられたような……そして現在の先生方とお話しをしてい

でも、その自由さと平らさはあまり変わっていないような気がする。在学当時から大学の教養砂漠とか五月病などといわれており、とりわけ京都大学理学部は放任主義といわれていたが、きわめて上質な環境で思う存分悩めたこと、そしてさまざまなすばらしい方々に出会えたことは、わたしにとって文字通り「有り難い経験」、望んでも得難いことだった。

昨年、設立総会後の懇親会でお話をするために壇上に上ったときに、JIR でインタビューをさせてもらった先生をはじめ、たくさんの数学者の方々が集まっておられるのを見た瞬間、わたしはこの教室が生み出してきた数学者の方々の優秀さと多さに圧倒された。それは、学部にいた頃を含めて、それまで一度も感じたことのない衝撃だった。一時ではあるが、この方々と同じ場所をうろうろしていたことが、不思議ですらあった。

今考えると、関わってくださった先生方にはひたすら申し訳ないような卒業生だったが、それでもこの数学教室の卒業生として、今後も一般啓蒙書の翻訳をはじめとする（最近は数学者の先生の紹介も手がけている）仕事を通して、数学の外の世界の人々に数学の面白さを伝える作業を続けていきたいと思っている。そしてもちろん、京都大学理学部数学教室のますますのご発展を心からお祈りしている。